

愛知淑徳大学大学院開設 25 年に寄せて

愛知淑徳大学大学院文学研究科 第1期生 佐々木 裕美

これといった取り柄のない私ですが、唯一の自慢は、どこに行っても素晴らしい師や上司に恵まれる幸運を得てきたことです。小学校時代の武内豊先生、中学・高校時代の太田守先生と呉佳代子先生、大学時代の岩野一郎先生、就職した企業の小松登・野口正秋両代表取締役…。そして25年前の出会いが現在の私を決定づけました。

中日新聞でふと目にした愛知淑徳大学大学院開設の広告に記載された教授陣の豪華ラインアップに惹かれて、無謀にもアメリカ文学研究の門をたたきました。外国語学部で合衆国の政治文化を中心に学んできた私にとって、文学研究は未知の分野でした。フランクリン、クレヴクール、クーパー、ホイットマン、マーク・トウェイン、ソローと、アメリカ史に登場する名前は知っていても、文学研究の目的で作品を読んだことはなく、入学者の一人に仲間入りできたのは、「一期生」だったからこそその幸運のゆえでした。

授業のみならず、教室の外での先生方との密度の濃い交流も、一期生ならではの特権でした。廊下ですれ違ったサンジャック先生から修論について何時間も質問攻めにされた時には、どのような分野であれ研究論文はこのようにテーマを突き詰めて書くのだと教えていただきましたし、飛騨林間学舎の淑友館で院生仲間とともに夜中まで学び語り合った小林素文先生の「集中講義」も楽しい思い出です。イギリス紳士のアイアランド先生が研究会の後に振舞われるシェリー酒、柳先生の女性論と大野先生のジェンダー論、今は亡き堀内先生の優しい笑顔…。研究者を育てようと、分野を超えてどの学生にも指導を惜しまない先生方の人となりに触れる多くの機会にも恵まれました。

指導教授の太田英雄先生は、フォークナー研究の大御所であるうえに研究の裾野が広く、文学研究の入り口で格闘する私を笑わずに正面から受け止めてくださいました。Hoffman の *The 20s*, Veblen の *The Theory of the Leisure Class*, H.L. Mencken の批評など、アメリカ研究にも通じる著作を使って、文学少女とは程遠い私に、忍耐強い指導が続きました。

年を経るにつれ、太田先生のもとには多くの「後輩」たちが集うようになりました。5年間の博士課程を終えて、「研究生」としてさらに3年間在籍し、その後就職するまでの3年間は「20 世紀英米文学研究会」と称してほぼ毎週、輪読会とは名ばかりの、「太田ゼミ」を続けていただきました。「エミリー（"A Rose for Emily"）が可哀想でたまらない」と話してくれた戦争体験者で文学青年の小塚健さん（故人）には、アメリカ文学に親しむことのできる幸せを教えていただきました。

太田先生には、発表原稿のコメントを求めて何度も玄関のチャイムを鳴らしてご迷惑をおかけしました。今、ゼミ生を持つ身になってみて、どれだけ手のかかる面倒な学生であったかと、申し訳ない思いと、それをはるかに超える感謝の気持ちでいっぱいになります。

11 年分の授業ノートと先生の書き込みが入った研究論文の原稿は、私の宝物です。この数年間は、文学の背景となるアメリカ社会の研究に取り組んできましたが、ようやく最近フォークナー研究との新たな接点が見えてきたような気がしています。そろそろまた腰を落ち着けて、フォークナーの女性たちと静かな対話を始めてみたいと思います。まだまだ学習意欲の衰えない先生に語ることのできる新しいネタを持って、また玄関のチャイムを押したいと思うこの頃です。